栗東歴史民俗博物館

収蔵品展「仏教美術の名品」

平成 23 年 10 月 29 日（土）～平成 23 年 12 月 4 日（日）

ご あ い さ つ

博物館が様々な活動をする上での基盤となるものは、博物館資料です。博物館資料の充実化は、博物館の運営にとって最も重要な課題であり、「栗東の歴史と民俗」を常設展示のテーマとする栗東歴史民俗博物館でも、地域に密着した資料とテーマの掘り起こしに努めています。

地域の歴史や文化を理解するためには、その地域の中にある資料を掘り起こすだけではなく、異なった地域の資料や作品と比較することも必要となります。開館より 20 年余を経た当館では、様々な活動を積み重ねる中で、栗東市内だけではなく市外の皆様からもご信頼をいただき、貴重な資料や作品のご寄贈・ご寄託のお申し込みをお受けしてまいりました。

博物館に収蔵させていただいた様々な資料は、常設展示「栗東の歴史と民俗」や、特集展示などで、折に触れて紹介しておりますが、中には資料保護のため展示期間を制限しているなどの理由で、平素は展示室に展覧していない資料も数多くあります。今回の収蔵品展「仏教美術の名品」では、そのような数多くの博物館収蔵資料の中から、仏教美術に焦点を当てて紹介いたします。

この収蔵品展を通して、地域の歴史と文化についてご理解を深めていただく一助となれば幸いです。

平成 23 年 10 月
栗東歴史民俗博物館

解説集

・阿弥陀如来坐像　　1 幅　　（栗東市指定文化財）

絹本著書　縦 89.9 ㎝　横 38.2 ㎝

鎌倉時代

真宗大谷派安養寺（栗東市安養寺）

――

独尊で描かれる阿弥陀如来坐像だが、細部を見ると、転法輪印の手の形、胸の中央に卍をあらわすこと、掌や足裏に千輻輪を描くこと、褊袒右肩に着した衣の裾を蓮台に懸けること、左足を外側にして結跏趺坐した足元に衣の裾を巻き込んで渦文をあらわすことなど、当麻曼荼羅の主尊の姿に等しい。当麻曼荼羅は鎌倉時代に多くの作例がつくられており、本図は主尊のみを転写した関連作品と考えられる。

着衣には精緻な截金をおき、肉身は朱線でくくられる。卵型の顔の輪郭、腰が引き締まり膝の幅の豊かなめりはりのある体形などは、13 世紀前半の慶派の彫刻にも通じる。

・阿弥陀三尊来迎図　　1 幅

絹本著色　縦 58.7cm　横 25.0cm

南北朝時代

真宗大谷派安養寺（栗東市安養寺）

――

向かって右斜め下に来迎する阿弥陀三尊像である。金泥塗による皆金色身、肉身の輪郭は墨細線であらわしている。着衣などに截金文様が施される。阿弥陀の頭光中心部から発している筋光明は円形に広がり、長く伸びる一筋は往生者のもとに達しているのであろう。

両手で蓮台を捧げているのは観音菩薩、中腰で合掌しているのは勢至菩薩である。

・釈迦三尊十六羅漢図　　1 幅

絹本著色　縦 156.2 ㎝　横 63.7 ㎝

室町時代

東方山安養寺（栗東市安養寺）

――

奇岩や樹木などの自然景の中に釈迦三尊を描き、下方に十六羅漢を点在させる。釈迦三尊はいずれも頭光を負い、朱の大衣に褊衫を着した釈迦は右足を上にして蓮台上に坐し、獅子上の蓮台に坐す文殊菩薩は如意を執り、象上の蓮台に坐す普賢菩薩は両手で巻子を広げている。三尊像下方の岩の上に描かれる十六羅漢は、様々な姿で表されている。

このような羅漢図は、宋元画の影響を受けて鎌倉時代末から現れるが、本図は中間色や金泥で描かれた文様、肉身や着衣の描線などから、室町時代の早い頃に制作されたものとみられる。

・仏涅槃図（長崎画工小原慶雲）　　1幅

絹本著色　縦 156.2 ㎝　横 85.1 ㎝

享保 6 年（1721）

円満寺（近江八幡市多賀町）

――

涅槃とは釈迦の死を指し、その情景を描いたものが涅槃図である。多くの場合、画面中央に宝床台の上に横たわる釈迦を描き、周囲に衆生や動物を描く。本図のように、上空に様々な神仏、水上に龍王や擬人化された水中生物を描く作例は珍しい。

表具裏面の墨書の識語に、「享保六年辛丑四月一日」とあり、文中に「長崎画工小原慶雲所図」とあることから、享保 6 年（1721）に長崎の小原慶雲によって描かれたことが知られる。小原慶雲の詳細は不明ながら、長崎の黄檗画僧、河村若芝（1638～1707）の弟子に小原慶山がいることが知られ、名前の近似から両者の関係が推測される。

・観経変相図（当麻曼荼羅）　　1幅　　（近江八幡市指定文化財）

絹本著色　縦 196.0 ㎝　横 192.1 ㎝

南北朝時代

浄厳院（近江八幡市安土町慈恩寺）

――

『観無量寿経』（観経）の内容を絵にあらわした観経変相図のひとつ。奈良時代後期、淳仁天皇の御世に、中将姫が蓮糸を用いて一夜で織り上げたとの伝説をもつ当麻寺（奈良県）の綴織の作例を根本とするものを、特に当麻曼荼羅と称する。

画面中央に説法相の阿弥陀如来を中心とする極楽浄土の様子を描く。むかって左には、観経序に説かれる王舎城の物語、右には修行の方法としての十三観、下方には九品往生の様子が描かれる。

別保存となる裏書に、暦応 5 年（1342）に供養されたことが伝えられ、その頃の作とみてよい。

・地蔵十王図　　5 幅（11 幅のうち）　　（重要文化財）

絹本著色　各縦 53・5 ㎝　横 47.0 ㎝

元時代（1271～1368）

永源寺（東近江市永源寺高野町）

十王は、初七日から三回忌まで亡者の生前の罪業を順に審判する十人の王で、彼らの審判によって亡者の転生先が決まるとされた。十王に対する信仰は中国で唐代末から五代にかけて成立し、のちに冥界の救済者である地蔵菩薩への信仰と結びついて広まった。

本作品も十王を描く 10 幅と、地蔵菩薩を描く 1 幅から構成される。十王は道服を着し、山水画の描かれた衝立の前に座して、前に引き出されて折檻を受ける亡者をまさに裁かんとするところである。本図は、「慶元府車橋石板巷陸信忠筆」の款記を持つ。陸信忠は、水陸交通の要衝であった中国浙江省の寧波周辺で活躍した画家で、中国の画史には見えないが、日本には彼の款記を持つ作品が多く請来されている。

十王		
初七日	秦広王	
二七日	初江王	
三七日	宋帝王	
四七日	五官王	
五七日	閻魔王	
六七日	変成王	
七七日	泰山王	
百日	平等王	
一周忌	都市王	
三回忌	五道転輪王	

日数の数え方は二七日ならば亡くなってから十四日目（2×7日目）。七七日ならば四十九日目（7×7日目）となる。現在も没後の法要として行われる初七日や四十九日、一周忌などは、この十王による冥界での裁きの信仰とも関連がある。

ここで展覧しているのは、変成王から五道転輪王までの 5 幅である。

・聖徳太子和朝先徳高僧連坐像　　1 幅

絹本著色　縦 120.1cm　横 55.6cm

南北朝～室町時代

興敬寺（蒲生郡日野町西大路）

聖徳太子は、天竺では勝鬘婦人、唐土では南岳恵思、そして日本では聖徳太子へと転生し、日本に正法を伝えて仏法興隆の礎を築いたという伝説を持つ。

本資料では、画面中央下寄りに柄香炉を捧げる童子形の聖徳太子を描き、足元に百済博士学哥、小野妹子、阿佐太子、蘇我馬子、慧慈、日羅の六随臣をあらわす。上方の高僧たちは、日本の浄土思想に大きな足跡を残した源信から、源空（法然）、親鸞へと続き、そして引き継がれてい

った真宗の世系を示す。法の流れを視覚化し、見るものに再認識させる内容である。

・親鸞聖人像（実如裏書）　　1 幅

紙本著色　縦 106.3 ㎝　横 49.8 ㎝
明応 2 年（1493）
真宗大谷派安養寺（栗東市安養寺）

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

格狭間をもつ礼盤の上に繧繝縁の畳座を置いて坐す親鸞聖人像である。画面上部に「入出二門偈」の四句が書かれている。裏書から、明応 2 年（1493）に本願寺九世実如から安養寺の幸子坊善淳に下附されたものとわかる。

裏書）

釈実如（花押）
明応二年　癸丑七月廿八日
江州栗本郡
大谷本願親鸞聖人御影
安養寺
願主釈善淳

・方便法身尊号（十字名号）　　1 幅

絹本著色　縦 99.2cm　横 33.4cm
室町時代（寛正 3 年＝1462 か）
徳生寺（栗東市伊勢落）

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

寺伝によると、室町幕府に仕えた田中宗綱が享徳元年（1452）にこの地に遁世し、寛正 3 年（1462）に手原道場（圓徳寺）で蓮如上人と出会い、出家して宗欽と号し、十字名号を賜ったという。蓮台の截金などの表現は、寛正の頃の作として不自然ではない。

裏書は失われるが、写しによると「方便法身之尊号　大谷本願寺釈蓮如／近江国栗本郡伊勢落村道場／願主釈宗欽／寛正三年壬午三月十八日」というものであった。

・方便法身尊像（実如裏書）　　1幅

絹本著色　縦 103.3cm　横 41.0cm

明応 2 年（1493）

真宗大谷派安養寺（栗東市安養寺）

蓮如の五男で本願寺第九世を継いだ実如の裏書をもつ阿弥陀如来像で、真宗では「方便法身尊像」もしくは「方便法身尊形」とよんでいる。安養寺の幸子坊善淳に実如から下附されたものである。

裏書）

大谷本願寺釈実如（花押）
癸
明応二年　丑七月廿八日
江州栗本郡
方便法身尊像
安養寺
願主釈善淳

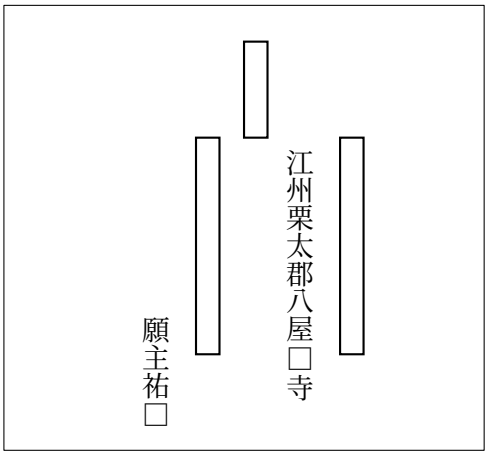
・方便法身尊像（実如裏書）　　1幅

絹本著色　縦 96.8cm　横 40.2cm

明応 7 年（1498）

永久寺（栗東市蜂屋）

『近江栗太郡志』によれば、大谷本願寺釈実如が明応 7 年（1498）5 月 5 日、願主祐専に下附したものとする。正面を向き直立する阿弥陀如来像は、実如の代に下附された方便法身尊像の典型的作例であり、明応 7 年の絵像としてよい。



裏書）

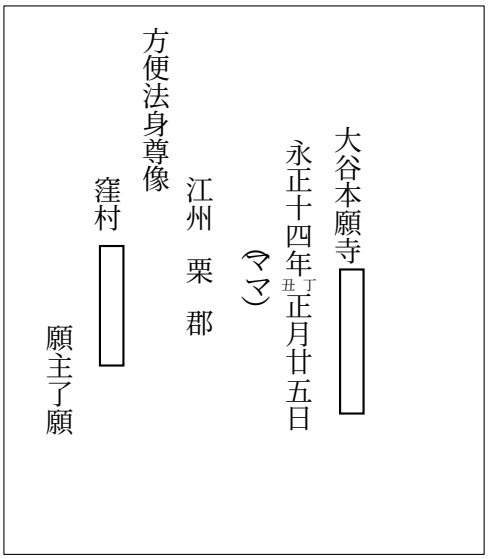
・方便法身尊像（実如裏書）　　1 幅

絹本著色　縦 100.9cm　横 41.1cm

永正 14 年（1517）

正覚寺（栗東市辻）

永正 14 年(1517)、窪村道場の了願に実如から下附された方便法身尊像。窪村道場は、興敬寺（現在の蒲生郡日野町）門徒であり、元禄 7 年（1694）、寂如より木造本尊の安置を許されている。



裏書）

・方便法身尊像（実如裏書）　　1幅

絹本著色　縦 74.5cm　横 35.5cm

永正 16 年（1519）

長徳寺（栗東市林）

―――

永正 16 年（1519）、興敬寺（現在の蒲生郡日野町）門徒であった高野祝塚惣道場に実如から下附された方便法身尊像。江戸時代に入り、長徳寺の寺号と木像本尊の安置が許される前、道場であったときに本尊として用いられていた絵像である。

（裏書）

大谷本願寺釈実如（花押）
永正十六年己卯七月廿五日
興敬寺門徒伊勢屋下
江州栗太郡高野祝塚
惣道場物也
方便法身尊像

・方便法身尊像（教如裏書）　　1幅

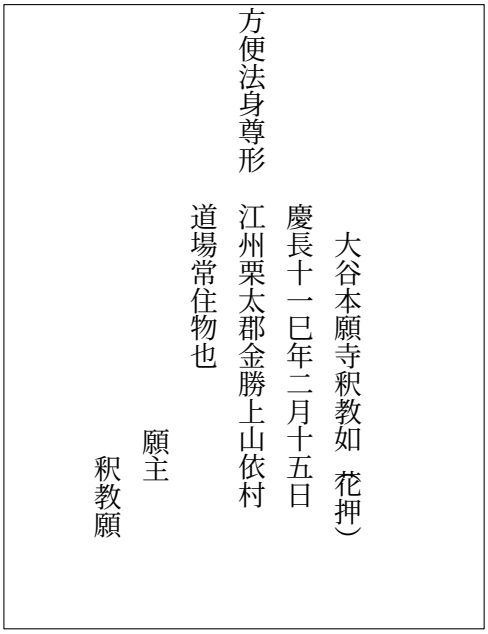
絹本著色　縦 86.7cm　横 38.4cm

室町時代

教願寺（栗東市御園）

―――

寺伝によると、教願寺は永正 7 年（1510）に天台宗寺院として開基された。本資料は、室町時代に遡る方便法身尊像である。教願寺は、僧教願のとき教如（1558～1615）に帰依し、本資料も教如の裏書を持つが、後世の写しと考えられる。



・多喜山城蹟絵図　　1巻

紙本著色　縦 24.0 ㎝　横 108.0 ㎝

近代

館蔵　里内文庫（№326-161）

――

栗東市の六地蔵から伊勢落にかけて所在する日向山のふもとは、中世には「高野郷」と呼ばれた地域で、戦国時代、織田信長らに対抗した真宗勢力「高野一揆」の本拠地であった。

高野一揆の背後には、日野の興敬寺や甲賀一揆、六角氏など信長に対抗する甲賀の勢力の存在もあった。多喜山城は、これらの勢力をおさえる砦として、織田信長方の武将によって現在の日向山に築かれたと考えられ、極めて重要な軍事拠点であったことが想像される。

・興敬寺門徒末寺之次第　　1通　　（滋賀県指定文化財）

紙本墨書　縦 27.3 ㎝　横 43.9 ㎝

安土桃山時代

興敬寺（蒲生郡日野町西大路）

――

興敬寺は、日野牧五カ寺の一として石山合戦時に大いに活躍した寺院である。興敬寺の門末は広く近江国内に展開していて、蒲生郡のほか甲賀、栗太、高島、滋賀各郡に及んでいる。栗太郡では高野郷の六地蔵福性寺（福正寺）を中心に、いせおち（伊勢落）・竹村・岩井ツカ（岩井塚、のち廃村となり林の一部へ）・市みやけ（三宅、のち六地蔵の一部へ）・土村・小坂・雲村（久保村、

辻の一部）・辻村・今せ（金勝）・中村（御園中村）・ツチ越（辻越、上山依の一部）・うつわり（梁、のち廃村）、中村（出庭の一部）・出庭・今里・小野の門徒衆である。

彼らは興敬寺の影響のもと、織田信長と独自に対峙したのであった。

・近江国栗太郡村々住民等起請文　　1巻のうち　　（複製品）

紙本墨書

元亀3年（1572）

館蔵（現品：国立歴史民俗博物館　蔵）

――

元亀元年（1570）9 月、大坂本願寺の顕如が織田信長と敵対し、石山合戦が始まると、栗太・野洲郡でも門徒らが立ち上がり、信長と戦った。

元亀3年(1572)9 月、信長軍は金森・三宅両城を攻略し、栗太・野洲郡の一揆を制圧した。本資料は一揆制圧前の 3 月、栗太・野洲郡の郷村から、金森・三宅の一向一揆に内通しないことを約して提出された起請文である。

・六字名号　　1幅

紙本墨書　縦 92.6cm　横 36.7cm

室町時代

真宗大谷派安養寺（栗東市安養寺）

――

栗東の地に真宗文化が盛んになったのは、本願寺第八世蓮如（1415～99）によるところが大きい。蓮如は、寛正の法難（1465)や応仁の乱（1467～77)を逃れて栗太・野洲郡に逗留しており、当地には、蓮如から坊主や門徒衆に授けられた如来の名号や画像、聖人の画像などが数多く伝わる。

弥陀の名号である十字の名号「帰命尽十方無碍光如来」（十字名号）が寛正の法難の原因となったこともあって、以後の蓮如は草書体の六字名号を大量に下附するようになる。本資料も、草書体になる蓮如筆の六字名号である。

寺伝によれば、蓮如から幸子坊善淳に下されたものと伝えていて、蓮如と縁の深かった安養寺にふさわしい名号である。

収蔵品展「仏教美術の名品」
栗東歴史民俗博物館
平成 23 年 10 月 29 日～12 月 4 日
滋賀県栗東市小野 223-8
077-554-2733
hakubutsukan@city.ritto.lg.jp